

(研究ノート)

「活動あって学びなし」の検証
—小学校から大学までのキャリア教育の接続に向けて—

松本 高宜・松尾 智晶・伊吹 勇亮

高等教育フォーラム 第4号抜刷 平成26年3月

「活動あって学びなし」の検証 —小学校から大学までのキャリア教育の接続に向けて—

松本 高宜¹・松尾 智晶¹・伊吹 勇亮²

キャリア教育は、小学校から大学までの円滑な接続が求められている。しかし、実際に小学校から高等学校までに経験したキャリア教育は、大学に円滑に接続しているのだろうか。キャリア教育における学習活動の経験は、大学でどのような能力実感につながっているのだろうか。そこで、キャリア教育での学習活動は、「活動あって学びなし」なのか、という仮説を立て、本学で調査検証した。結果、次のようなことが明らかになった。

- (1) 近年小学校でキャリア教育がさかんに実施されている。
- (2) キャリア教育を受けているか受けていないかということと、基礎的・汎用的能力が身についているかどうかの能力実感とは関係がない。
- (3) キャリア教育についての役立ち感と、基礎的・汎用的能力が身についているかどうかの実感とは弱い関係しかない。
- (4) キャリア教育が役立っていないと思う理由は、キャリア教育が抱えている課題である。
- (5) 大学でのキャリア教育の役立ち感と基礎的・汎用的能力が身についているかどうかの実感との関係で一番関係性があったのは人間関係形成能力である。

今後の研究課題としては、学校現場における実証的研究調査、キャリア教育の効果測定方法や効果の持続性、累積性などについて考える必要がある。

キーワード：キャリア教育、社会的・職業的自立、中教審答申、学び

1. はじめに

近年、学校教育におけるキャリア教育の必要性が認識され小学校から大学まであらゆる校種でおこなわれている。

キャリア教育について、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」と題して中央教育審議会(2011)が出された。

この答申によると「学校教育と職業や人材育成との連関は、我が国において、時代の変遷の中で繰り返し議論されてきたように、非常に重要な課題である。特に近年若者の社会的・職業的自立や学校から社会・職業への移行を巡る様々な課題が見受けられる。」とされている。

答申では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学、高等専門学校、専修学校の各学校段階で組織的・体系的にキャリア教育・職業教育を行う必要性及びその方途を述べている。

しかしながら、実際こうした組織的・体系的なキャリア教育ができているのであろうか。小学校から大学までのキャリア教育の接続について検証が必要ではないだろうか。

キャリア教育の効果と意義について川崎(2008)は、人間関係形成能力を中心に職場体験学習の効果が認められたとしたが、効果に関連する要因や効果の持続性についての検討が今後の課題であるとしている。

そこで、本研究ではキャリア教育における小学校から大学に至るまで、接続がうまくできているかどうかを調べていく。

「活動あって学びなし」という批判が教育現場で出てくるようになった時期と要因は、平成元年に小学校で新設された「生活科」や平成12年から小、中、高等学校で段階的にはじめられた「総合的な学習の時間」にある。

たとえば、生活科は、児童の身近な生活圏を学習の対象

¹京都産業大学 全学共通教育センター、²京都産業大学 経営学部

や場とし、児童が具体的な活動や体験を通して「自立への基礎を養う」ことをねらいとしている。

しかしながら、中央教育審議会(2008)では、生活科の課題として「調査などによると、学習活動が体験だけに終わっていることや、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導が十分に行われていない」とした。

いわゆる「活動あって学びなし」と批判されたのである。奈須(2001)は、こうした問題は、「総合的な学習の時間」において横行している、良い原理も正しく実践化されなければ効果は期待できないとした。

我が国における小、中、高等学校におけるキャリア教育の大半が、総合的な学習の時間を中心として行われていることを考えると、この「活動あって学びなし」という批判が正しいならば小、中、高等学校におけるキャリア教育が大学までうまく接続できていないことになる。

そこで、キャリア教育がはたして活動あって学びなしになっているのかどうかについて検証が必要であると考えた。本研究では、キャリア教育を受けてきた学習者と「役立ち感」「能力感」との関係について調査をおこなった。

2. キャリア教育とは

2.1. キャリア教育の定義

キャリア教育という言葉が教育界や社会一般で使われているが、その内容についての解釈は一定でない。

中教審で答申されている内容をふまえながら定義していく。

文部科学省(2004)では「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」とし、キャリア教育を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」ととらえ、端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」とした。

中央教育審議会(2011)では、キャリア教育について次のように定義がされた。「キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育である。」

我々は、キャリア教育は、中学校、高等学校で行われている職場体験、進路指導、職業に関する理解などに限定されるものではなく、すべての教育活動を通して行うべきものであると考える。子どもたちが成長して、いつか社会人となるときに、自分の役割を果たしながら自分らしい

生き方を実現するためには、いろいろな力が必要である。

キャリア教育の目的は、学習の主体者が、小学校から大学まで常に学ぶことの意味や学ぶことと生きていくことのつながりを考え、自分自身を見つめなおし、長所を伸ばし、将来社会で自己実現を図っていこうとすることである。キャリア教育に必要なことは、まずは、こうした視点で今までの教育活動を見直していくことである。

したがって、数学、国語など教科の学習においてもキャリア教育の視点で学ぶ意味を考えていくことが必要である。

キャリア教育の視点で教科の学習を考えてみると、たとえば、小学校高学年の国語で敬語の学習があるが、単に常体の文章を敬語表現に直すことができればいいのではなく、日常生活のどういう場面で、なぜ敬語を使うのか判断ができることが大切である。学習者が正しい敬語を活用していくことが、人間関係をよりよくしていくことに繋がっていくことを実感できてこそ敬語を学ぶ意味がある。

よって、教科等で習得する基礎的・基本的な知識・技能を次につなげ、社会で活用できるかは、キャリア教育で身につけたい能力や意欲・態度などと関係が大きい。

中央教育審議会(2011)では、教科等で学ぶ「基礎的・基本的な知識・技能」やキャリア教育で身につけたい能力や意欲・態度などを構造的に示した。この構造の中で示され

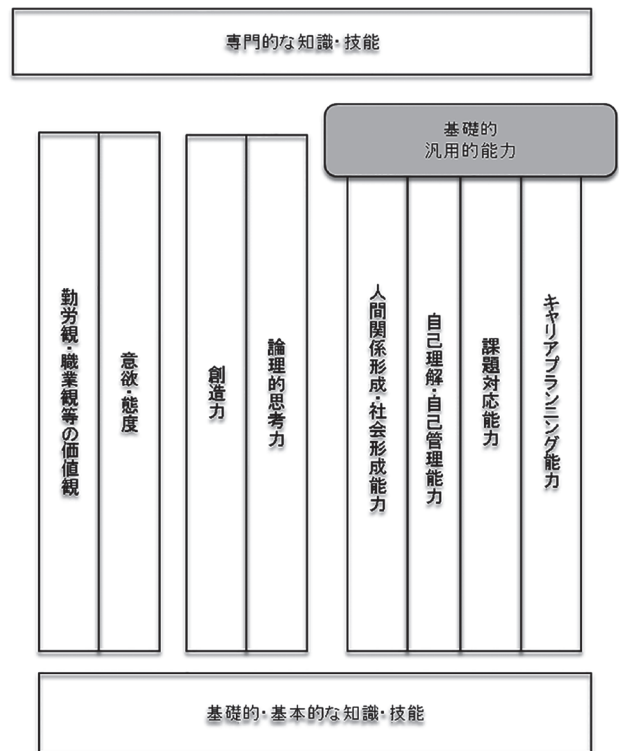


図1. 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素 中央教育審議会(2011) p27

た基礎的・汎用的能力とは、分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力として
いる。(図1)

2.2.小学校から高等学校までのキャリア教育の京都市での実例

京都市では、中央教育審議会(2011)を踏まえつつ京都市独自のキャリア教育として「生き方探究教育」という名称で実施している。生き方探究教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことができるようにする教育である。」

京都市教育委員会(2012)では、生き方探究教育で育てたい4つの力を「人とともに社会を生きる力・自分を知り、律する力・課題を見つけ、解決する力・夢や希望をつくりあげる力」としている。

京都市では、市立の幼稚園から高等学校、総合支援学校までさまざまなキャリア教育が取り組まれている。

京都市教育委員会(2012)には、幼稚園から高等学校までキャリア教育の具体的な例が紹介されている。

幼稚園と小学校が幼小連携で取り組んだ授業例として、「一緒にポップコーンパーティ」という取組がある。

この授業では園児と児童が学習を通して交流することで人とともに生きる力、人間関係形成能力を高める。

園児が小学校生活に対して安心感をもち、児童は上級生として自信を持つことができるようになることが目標である。

小学校では、教科・領域等全ての学校教育活動において、学習規律やマナー、学習方法、形態、意義付け等を工夫することで、系統的・継続的に基礎的・汎用的能力を育てている。

中学校では、体験や活動で学んだこと、自ら追究した課題をポスターセッションという形で発表する。こうした言語活動を通してコミュニケーション能力を高め、人間関係形成能力を高めている。

高等学校では、各校の教育目標、特色に応じた企業・事業所で实际的な知識や技術・技能に触れる活動をおこない、学校における学習と職業との関係について理解を深めている。

このようにそれぞれの校種でキャリア教育は行われている。

2.3.大学でのキャリア教育の例

次に大学でのキャリア教育は、どのようにおこなわれているのかについて、京都産業大学を例にする。

京都産業大学では、1年生から4年生まで多彩なキャリア形成支援科目が開講されている。(図2)

その特徴の一つとして、学内で学ぶこと(On Campus)、学外で学ぶこと(Off Campus)がある。そのねらいについて、京都産業大学キャリア教育研究開発センター(2013)には、学外(Off)での学びで今の自分の課題に気づき、その経験が学内(On)での学びをさらに深めるとある。

では、具体的にどのような科目があるのか。

京都産業大学のキャリア形成支援科目である「自己発見と大学生活」は、1年次の学生を対象とするが、受講生が2000名を超える。大学が作成した授業案内には「大学生活をどのように過ごせばいいのか?」「自分は将来、何をしたいのか?」とある。

こうしたことがわからないまま1年、2年が過ぎていってしまわないよう、大学入学をキャリアデザインへの大きなステップとして捉え、大学生活、そしてその後の社会や仕事、働くことについて、受講生同士、担当教員と一緒に考え、大学で学ぶ意味を見つけていくとしている。

同じく1年次を対象としたO/OCF-PBL1(On/Off Campus Fusion-Project Based Learning)では、課題解決に必要なチームワーク力を付けるための準備に力を

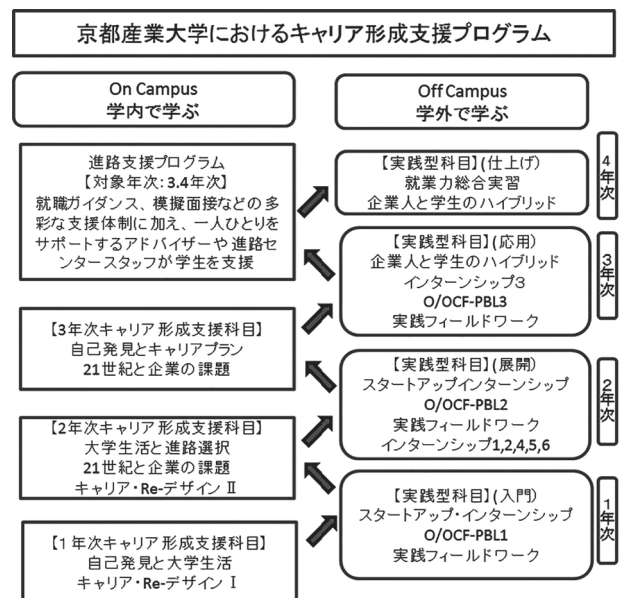


図2. 大学におけるキャリア形成支援プログラム例(京都産業大学キャリア教育研究開発センター(2013)より抜粋作成)

入れる。こうした力を醸成した後、PBL2、PBL3へと進み、企業等から提供された課題に取り組む。実践を重ねるなかで自分の成長が実感でき、さらなる向上心や自信につながり、実践的な問題解決能力を磨き上げる。

2.4. キャリア教育に期待されていること

キャリア教育はすべての教育活動に関わるものと考えられるが、これは全く新たな教育をおこなうことを求めたものではなく、中央教育審議会(2011)には「各学校がキャリア教育の視点に立って教育の在り方を幅広く見直すことにより、教職員に教育の理念と進むべき方向が共有されるとともに、教育課程の改善が促進される。このような視点に立って教育活動を展開することにより、学校教育が目指す全人的成長・発達を促すことができる。」とある。

つまり、児童・生徒の実態に即したキャリア教育をおこなっていくことが学校教育目標の達成に繋がると考えることができる。さらに、答申は「キャリア教育を実践し、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け、将来の夢と学業を結び付けることにより、生徒・学生等の学習意欲を喚起することの大切さが確認できる。このような取組を進めることを通じて、学校教育が抱える様々な課題への対処に活路を開くことにもつながるものと考えられる。」としている。このことは、キャリア教育を通して、学ぶことと生きていくことの繋がり、学ぶことの必要性に気づいた生徒・学生が自ら意欲的に学んでいくことが期待できることを示唆している。

3. 先行研究と5つの課題

3.1. 先行研究

中央教育審議会(2011)では、キャリア教育の基本的方向性として、「キャリア教育は、キャリアが子ども・若者の発達の段階やその発達課題の達成と深くかかわりながら段階を追って発達していくことを踏まえ、幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが必要である。」としている。

ただ、小学校から高等学校までのキャリア教育が大学にどのように接続されているかということについての研究は少ない。そうした状況の中で、安井(2007)は、小学校から高等学校までどの程度キャリア教育を受けてきたか、キャリア教育が大学に入って役立っているかどうかなど、学生の実感について調査をおこなった。

ここでは、安井の調査研究を先行研究とする。安井は、2005年に高校までに受けたキャリア教育について岐阜女子大学1年生233人に対して質問紙調査を実施した。

まず、これまでにキャリア教育を受けたことがあるか。(複数回答可)という質問に対しては、次のような回答が得られている。

高校で受けた者	—74.7%
中学校で受けた者	—63.1%
小学校で受けた者	—3.4%
受けたことがない者	—4.7%

この結果から、ほとんどの学生が、高校までになんらかのキャリア教育を受けていることがわかったとしている。

高校までに受けたキャリア教育が、現在の進路選択や将来像に役立っているかという質問については、

とても役立った	—10.2%
少し役立った	—56.3%

と66.5%の学生が肯定的に受け止めていて、役立たなかったと考えている学生は約2割であったとしている。

さらに、将来のキャリアの方向性については、7割の学生が決めていたとしている。

3.2. 5つの課題

安井(2007)の調査では、キャリア教育を受けたことがあるかどうかとキャリア教育でつけたい能力が身につけていると実感しているかどうかの相関は不明である。

また、キャリア教育が役立っていると回答している学生とキャリア教育でつけたい能力が身につけていると実感しているかどうかについての相関も不明である。

さらに大学でのキャリア教育との相関についても安井の調査ではふれていない。

そこで本研究では、つぎの5つの課題を設定して、こうしたキャリア教育と学びの実感、つまりキャリア教育が「活動あって学びなし」になっていないかどうかについて研究を進める。

課題1 安井(2007)調査の追試を実施し、結果の比較をおこなう。

課題2 キャリア教育を受けているかいないかということと、キャリア教育でつけたい諸能力が身につけているかどうかの実感(能力実感)との間に相関があるかどうかについて考察する。

課題3 小学校から高等学校までのキャリア教育の役立ち感の有無とキャリア教育でつけたい諸能力が身につけているかどうかの実感(能力実感)との間に相関があるかどうかについて考察する。

課題4 小学校から高等学校までのキャリア教育の役立ち感の低さの要因はどのようなものなのか明らかにする。

課題5 大学でのキャリア教育の役立ち感の有無とキャリア教育でつきたい諸能力が身についているかどうかの実感(能力実感)との間に相関があるかどうかについて考察する。

4. 調査方法

4.1. アンケート調査

安井の調査と同様の調査を京都産業大学においても実施した。それとともにキャリア教育でつきたい力について、どの程度実感しているかも調査した。2013年11月に京都産業大学でO/OCF-PBL (On/Off Campus Fusion-Project Based Learning 1、以下「PBL1」と表記)を受講している1年生226名に対して質問紙調査を実施した。

また、調査後8名の学生に対してインタビュー調査をおこなった。質問内容は、質問1から質問4までは、安井(2007)に基づいた。質問5-12までは、中央教育審議会(2011)にある、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力とされている基礎的・汎用的能力とした。^{注1)}

分析方法は、課題2についてはt検定、課題3・5については相関分析をおこなった。

4.2. インタビュー調査

課題4に対応してインタビュー調査をおこなった。今までに受けたキャリア教育が役立っていないと回答した学生8名に対して2013年11月に面談をおこなった。

質問内容は、

「小学校、中学校、高等学校のうち、いつの時期のどのような内容のキャリア教育について、役立っていないと回答したのか。」

「また、なぜ役立たなかったと感じているのか。」

である。

5. 調査結果

実施したアンケートの回答結果は、次のとおりである。(調査票については、巻末参照)

課題1 安井(2007)調査と今回調査の比較

まず、これまでにキャリア教育を受けたことがあるかということについて、次のような回答が得られた。

- 小学校で受けた者 —21.68%
- 中学校で受けた者 —71.24%
- 高校で受けた者 —69.91%
- 受けたことがない者 — 6.4%

この結果、安井(2007)の調査同様、ほとんどの学生が、高校までになんらかのキャリア教育を受けていることが

わかった。

安井(2007)の調査と比べると小学校で受けた者の割合が(3.4%→21.68%)と高くなっている。(表1)

次に、高校までのキャリア教育が現在の進路選択や将来像に役立っているかという質問については、

- 役立っている —19.91%
- 少し役立っている —42.04%
- あまり役立っていない — 7.08%
- 役立っていない — 5.31%であった。(図3)

この結果、安井(2007)の調査と比べると役立っていないとする割合が低いことがわかった。(21.8%→12.39%)

さらに、京都産業大学におけるキャリア教育(自己発見と大学生活、またはPBL1を受講している学生)について役立っているかどうかという質問については

表1. 安井(2007)と今回調査の比較

キャリア教育を受けたことがあるか		
	安井(2007)調査	今回調査
小学校で受けた	3.4%	21.68%
中学校で受けた	63.1%	71.24%
高等学校で受けた	74.7%	69.91%

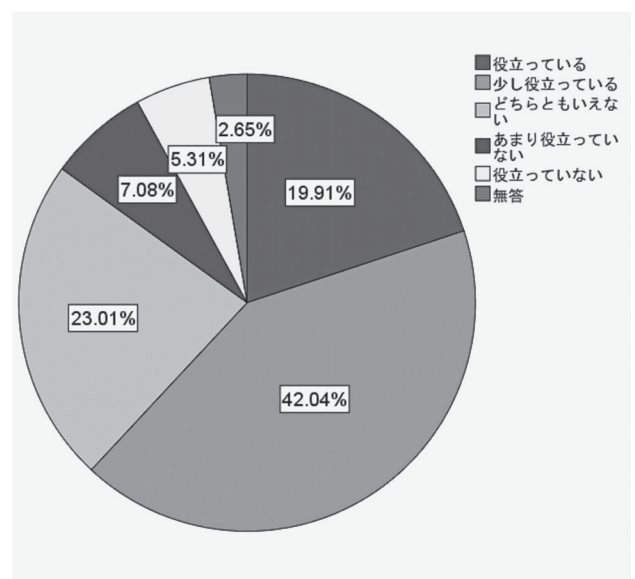


図3. アンケート結果(質問2)

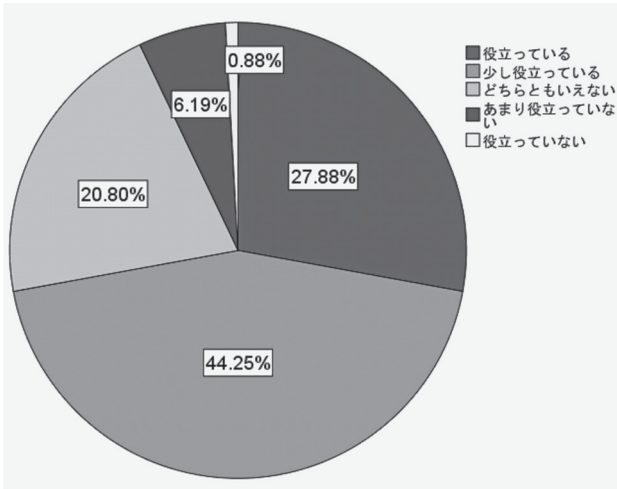


図4. アンケート結果(質問3)

役に立っている —27.88%

少し役に立っている —44.25%であり、

合わせて72.18%の学生が京都産業大学の1年生で受けたキャリア教育が役に立っていると回答していることがわかった。

大学でのキャリア教育が役に立っていないと回答した者は合わせて7.07%であった。(図4)^{注2)}

最後に、将来のキャリアの方向が決まっているかについては、「決まっている」「だいたい決まっている」と回答した者を合わせると44.24%であった。(図5)

この結果、7割が決まっているとした安井(2007)の調査と比べて低いことがわかった。

課題2 キャリア教育を受けているかいないかということ、キャリア教育でつけたい諸能力が身についているかどうかの実感(能力実感)には関係があるのか。

質問1において「キャリア教育を受けた」をY、「キャリア教育を受けていない」をNとし、このY・Nと質問5から12の諸能力の実感について検定をおこなったところ、すべての能力において平均値に差があるとはいえないことがわかった。

課題3 小学校から高等学校までのキャリア教育の役立ち感の有無と、キャリア教育でつけたい諸能力が身についているかどうかの実感(能力実感)には関係があるのか。

相関係数でみると質問2の結果は質問5から12の結果のいくつかと弱い相関があった。(表2)^{注3)}

課題4 小学校から高等学校までのキャリア教育の役立ち感の低さの要因は何か。

質問2でキャリア教育が役立たなかったと回答した者

8名へインタビューをおこなった結果、次のような回答があった。

(A)「キャリア教育はあったが、その場限りで、しかも実用的ではなかった。なんのためにやったのか、どんな力がついたのかもわからなかった。やったあとは何となく納得していたが、その後そうした経験をもう一度試せる場もなかった。」

(B)「高校時代、学校で先生から教えてもらう社会というものについての内容と自分がアルバイトで経験したことに違いがあり、自分が経験から学んだことの方が勝っていると感じた。授業もひとりひとりに合った話をしてくれなかった。」

(C)「中学校で職場体験をしたが自分の希望だったスポーツジムではなく福祉施設へ行った。やりたいことが体験できなかった。」

(D)「高校での授業がその場限りで短期だった。考える時間が与えられず結論が先にあった。課題が「施設があればいいもの」を考えることだったが簡単すぎた。」

(E)「中学校のキャリア教育の中身が話したり聞いたりしただけだった。職場体験も先生のサポートが大きすぎて自分でやった気がしなかった。」

(F)「自分が将来どんなふうになるか決めていないうちにキャリア教育があったから、あまり価値を感じなかった。」

(G)「キャリア教育らしきことはやったが、記憶に残っていない。内容を覚えていないし何のためにやったかわからない。どんな力がついたかもわからない。」

(H)「中学で職場体験に3日間行ったが役に立った気がしない。とりあえず行って仕事を教えてもらった。中学生

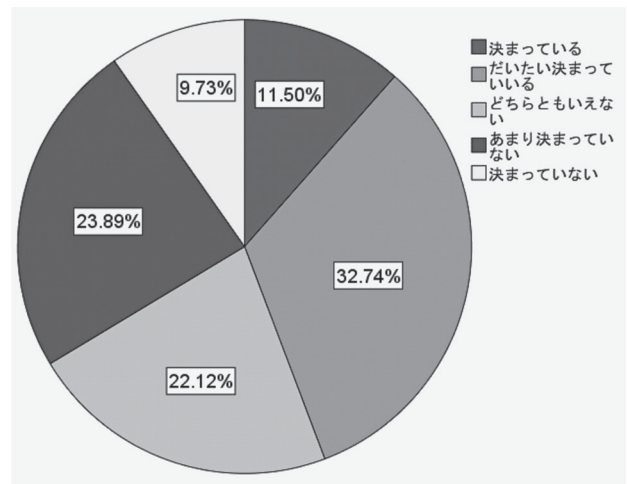


図5. アンケート結果(質問4)

表2. 質問2.3と質問5-12の相関係数

			相関係数									
			Q5人間関係形成能力	Q6社会形成能力	Q7自己理解能力	Q8自己管理能力	Q9課題発見能力	Q10課題解決能力	Q11役割認識能力	Q12特長設計能力		
Spearman	Q2高校までのキャリア教育役に立っているか	相関係数	.220**	.127	.253**	.237**	.056	.075	.130	.115		
		有意確率 (両側)	.001	.057	.000	.000	.400	.262	.051	.085		
		N	226	226	226	226	226	226	226	226	226	
	Q3大学でのキャリア教育役に立っているか	相関係数	.256**	.079	.141*	.114	.080	.065	.125	.099		
		有意確率 (両側)	.000	.235	.034	.087	.233	.412	.061	.139		
		N	226	226	226	226	226	226	226	226	226	

**、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。
*、相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

だから軽い仕事を手芸センターでさせてもらったが、こんなものなのかという印象だった。高校は、何もなくて、どうして大学に行くのかなど具体的なことを考えたり知ることができたりする時間が欲しかった。」

課題5 大学でのキャリア教育の役立ち感の有無とキャリア教育でつけたい諸能力が身についているかどうかの実感(能力実感)には関係があるのか。

質問3の結果は質問5から12の結果といくつかの弱い相関があった。(表2)

6. 考察

6.1. 安井(2007)との比較

質問1の結果から小・中・高等学校で9割以上の学生がキャリア教育を受けていたことがわかった。安井(2007)の調査に比べて、中学校や高等学校での経験者の割合は、さほど変わらないが、小学校で受けた者の割合が(3.4%→21.68%)と高くなっている。

小学校での経験数は、今回の調査と大きな差がある。この差が生じた要因の一つに、安井(2007)の調査以降、中央教育審議会(2008)が、社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項としてキャリア教育を充実する必要があることを明示した。

このことから、その後、全国で小学校段階からキャリア教育を取り組むようになってきた。

たとえば、京都市では2008年より市内すべての小学校で職業体験プログラムを実施している。今回の調査時期は2013年であり、調査結果からは、小学校現場でのキャリア教育が普及していることがうかがえる。

質問2「高校までのキャリア教育が現在の進路選択や将来像に役立っているか」については、安井(2007)の調査と比べると役立っていないとする割合が低い。(21.8%→12.39%)

このことから、安井の調査以降、中学校や高等学校でキャリア教育の取組が改善されていることが考えられる。

その要因としては、文部科学省が小学校から高等学校まで現場の教員向けにキャリア教育の手引きを作成し、全国規模での指導者研修会を実施してキャリア教育の普及に努めてきたこともあると思われる。

自己発見と大学生生活、またはPBL1をすでに受講している学生に対する質問3「京都産業大学におけるキャリア教育が役立っているか」については

役立っている —27.88%

少し役立っている —44.25% (再掲)であり、

合わせて72.13%の学生が京都産業大学の1年生で受けたキャリア教育が役立っていると回答している。

大学でのキャリア教育が役立っていないと回答した者は7.07%であった。安井(2007)には、大学でのキャリア教育についての調査結果がないのでこの点は比較ができないが、京都産業大学のキャリア教育が70%を超える役立ち感をもたらしている点は、評価をしてもよいと思われる。

質問4「将来のキャリアの方向が決まっているか」については、決まっている、あるいは、だいたい決まっていると回答した者は合わせて44.24%である。

7割が決まっていると回答した安井(2007)の調査に比べて低い。安井の調査結果と比べてこの差が生じた要因は何であろうか。

安井(2007:p83)は、このことについて次のように述べている。

「将来のキャリアの方向性については、7割の学生が決めていた。これは、調査対象が1年生であることを考えるとかなり高い割合であるように思われるが、この理由については、本学が管理栄養士、保育士、デジタルアーキビスト、学芸員、社会教育主事、図書館司書、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教員等の資格の取得を積極的にアピールしていることなども影響していると考えられる。」

つまり、大学が具体的な職業のイメージを持ちやすい資格取得という目的を通して、学生のキャリアの方向性

に強い影響を与えていることが示唆されていた。

6.2.高校までのキャリア教育と大学生の能力実感

課題2 キャリア教育を受けているかいないかということと、キャリア教育でつきたい諸能力が身についているかどうかの実感(能力実感)には関係があるのか。

質問1の結果Y・Nと質問5から12の諸能力の実感について検定をおこなったところ、すべての能力において平均値に差があるとはいえないことがわかった。

つまり、キャリア教育そのものが能力感と結びついていないことが考えられる。このことは、キャリア教育が「活動あって学びなし」となっている傍証といえるのではないか。

キャリア教育を受けているにもかかわらず、こうした結果が出る要因としては、学習が体験だけに終わっている、やりっぱなしに終わっている、学習の主体者である生徒にとってどんな目的でその学習を行うのが十分理解できていない、などが考えられる。この要因については、キャリア教育が役に立っていないと回答した者へのインタビュー調査によって、具体的な問題点がみえてきた。

課題3 小学校から高等学校までのキャリア教育の役立ち感の有無と、キャリア教育でつきたい諸能力が身についているかどうかの実感(能力実感)には関係があるのか。

結果は弱い相関がみられたが全般に強い数値ではなかった。弱い相関が認められたのは、人間関係形成能力、自己理解能力、自己管理能力であった。

しかし、課題発見や課題解決能力、役割認識能力、将来設計能力など今後の社会的・職業的自立に必要とされる他の能力とは相関がみられなかった。

このように、キャリア教育について役立ち感があってもなくても能力実感との間で相関関係がないということは、キャリア教育でつきたい力について、学習の前後で十分な説明や生徒の理解が得られていない可能性がある。

課題4 小学校から高等学校までのキャリア教育の役立ち感の低さの要因は何か。

質問2で役に立っていないと回答した学生のうち8名にインタビュー調査をした。その結果、キャリア教育が長年抱えてきて解決していない課題がいくつか明らかになった。

回答内容から課題を抽出すると次の3点になった。

(1)事前学習で理解されていない学び

何のための学習活動なのか十分な理解がないままおこなっている。何か学習をしたり経験をしたりしているの

だが、その学習活動の目的や身に付けなければいけない力についてきちんとした事前学習ができていないのではないか。

たとえば、全員が希望通りの職場で体験学習ができないのは仕方がないことであるが、きちんと職場体験の意義を説明してから学習を始めていない甘さがある。

こうした学習活動を重ねるとその学習に対して否定的なとらえかたにつながるのではないだろうか。

(2)事後学習で確認されていない学び

活動後の振り返りがあまりできていないことがわかる。自分は何をしてどう成長したのか。まわりのみんなは、どのように成長したのか。学びを確かめるためには自己評価や相互評価を行うことが効果的である。

(3)学びの吟味と量的保証が不十分

生徒が望んでいる学習活動なのかどうか丁寧な確認が欠けている。学校だけでキャリア教育を展開しないで広く社会の人材を生かす工夫をすれば、学習内容への不満も少なくなると思われる。その場限りのキャリア教育では、生徒も真剣になれず学んだことを生かせる場の保証がない。少し言い過ぎかもしれないがやりっ放しの教育になっているのかもしれない。

もっとも、多数の生徒は、キャリア教育が役に立っていると回答しており、キャリア教育が意味のないものであるわけではない。

さらに、こうした聞き取り調査だけで問題の本質を見極めるのは不十分であり、今後、小学校から高等学校までの教員に対する意識調査及び授業分析が必要である。

6.3.大学でのキャリア教育と能力実感

課題5 大学でのキャリア教育の役立ち感の有無とキャリア教育でつきたい諸能力が身についているかどうかの実感(能力実感)には関係があるのか。

最も高い相関係数がみられたのは、人間関係形成能力であった。このことから、キャリア教育についての役立ち感を高めると人間関係形成能力の能力実感が高まるといえるのであろうか。後藤(2012)は、京都産業大学のキャリア形成支援科目の一つであり今回のアンケート調査対象者が受講しているO/OCF-PBL (On/Off Campus Fusion -Project Based Learning)の受講生を調査し初年次教育が対人関係、つまり人間関係形成能力のうまさをあらかずPC値を高める効果を持つことを明らかにした。

今回のアンケート調査対象者は1年次生であり、大学でのキャリア形成支援科目をまだあまり受けていない状況であった。しかし一方で70%を超える学生が京都産業

大学のキャリア教育に役立ち感があると回答した。今後、能力実感との相関がより高まるようなキャリア教育のあり方を追究していくことが望ましいと考えられる。

6.4.活動あって学びなしなのか

今回の研究でキャリア教育を受けたか受けていないかと基礎的・汎用的能力が実感として身に付いているかどうかには相関がみられなかった。

キャリア教育が役に立っているかどうかと基礎的・汎用的能力との相関においては、一部の能力で相関があることがわかったが全体として関係性は低かった。

以上の分析だけで高校までのキャリア教育が「活動あって学びなし」に終わっているとするのは難しい。

しかし、学生に対する聞き取り調査の結果、キャリア教育が長年抱えている課題が解決されていないことがわかった。キャリア教育の推進について小学校から高等学校、あるいは大学において否定的な見方をする者は、キャリア教育が活動あって学びなしになっているか、そのように見えている可能性がある。

調査アンケート用紙の最後に「京都産業大学のキャリア教育について意見や感想を自由に述べてください。」という欄を設けた。ここに書かれた意見や感想の中に「活動あって学びなし」に終わらないキャリア教育を考えていくヒントがある。いくつか紹介する。

「自分の将来を少しでも考える機会になるので良いと思う。」

「自分のしたいことや将来の職業について考え直せると思う。」

「環境は整っていて自分次第で向上できるようなキャリア教育だと思う。」

「今までは何になりたいというのが夢だと思っていたが社会人になるためには何になりたいよりどういう人になりたいかが大切だと感じさせてくれた授業だ。」

「他大学の友達に話を聞いてみたがほとんどの答えがキャリア教育の授業がないと言っていた。当然のことをもう一度学ぶ良い機会であると思っている。」

「京都産業大学では社会に出て自分たちに必要とされる人としての能力やスキルなどを学ぶ環境を提供していただいている。」

これらの中に何度か出てくるキーワードがある。それは、「機会」「環境」である。

キャリア教育は、自分が社会でどのように生きていくかを考え、どのような道を選択するか意思決定していくことができるようにする教育である。

そうであるならば、学生が意見として述べているように、いい機会と学びの環境を提供できればいいという考え方もできる。基礎的・汎用的能力は、教えられるものではなく、自ら獲得していくものでなければならない。そうした力を獲得していく過程で生きる力が身につくのではないか。

では、小学校から大学まで「活動あって学びあり」のキャリア教育をめざすために、どのような接続を考えればいいのか。そのために明らかにすべき課題は何であろうか。

キャリア教育の効果と意義について川崎(2008)は、人間関係形成能力を中心に職場体験学習の効果が認められたとしたが、効果に関連する要因や効果の持続性についての検討が今後の課題であるとしている。そのためには、効果測定をする尺度について研究する必要がある。なお、大竹・平尾(2013)は、習得した能力の達成値の主成分分析を行って初年次教育が教育目標の達成に対して効果を持つことが示されたと述べている。この研究が尺度開発の参考となるかもしれない。

7. まとめ

7.1.本研究で明らかになったこと

本研究で明らかになったことは5点ある。

第一に、近年小学校でキャリア教育がさかんに実施されるようになってきていることがわかった。

第二に、キャリア教育を受けているか受けていないかということと、基礎的・汎用的能力が身についているかどうかの能力実感とは相関がみられないことがわかった。

第三にキャリア教育についての役立ち感と、基礎的・汎用的能力が身についているかどうかの実感とは弱い相関しかみられない。

第四にキャリア教育が役立っていないと思う理由は、キャリア教育が抱えている課題である可能性があった。

最後に大学でのキャリア教育の役立ち感と基礎的・汎用的能力が身についているかどうかの実感で最も強い相関がみられたのは人間関係形成能力である。

以上五点が本研究で明らかになったことである。

7.2.今後の研究課題

キャリア教育が「活動あって学びあり」となり、円滑な接続が実現するための研究課題を最後に挙げたい。

第一に、今回の研究では明らかにできなかったが、小学校から大学までのキャリア教育の接続を考える上で、小中高、および大学教員に対する意識調査及び授業分析が

必要である。

キャリア教育の円滑な接続がなされていないとの問題意識から、まずは大学という場において研究を進めたが、大学以前の教育現場に目を向け、教職員自身がどのような意図でどのようなキャリア教育を行い、結果、どのような成果と課題を認識しているかについて調査、研究する必要があると考える。

教育現場における調査研究の視点として、次の4点を示したい。

- (1) 体験活動を伴うキャリア教育をおこなうときには、事前学習で、その活動目的や学習そのものの意義について理解できるような工夫があるか。
- (2) 体験活動をおこなったあとは、きちんとした振り返りをおこない、学習の当事者が身に付いた力や学びの内容について自己評価できるとともに集団で高めあえるような相互評価の場があるか。
- (3) キャリア教育をおこなう際、目標の評価基準と観点を設定し、評価方法について十分な検討があるか。
- (4) 学習の主体者が誰であるかを考え、実施しようとしているキャリア教育の体験活動が、彼らが望んでいる機会であり、彼らが学ぶことができる環境になっているかどうか吟味されているか。

第二に、学習の主体者である小、中、高校生の学習効果の持続性や累積性についての意識調査が必要である。

第三にキャリア教育の効果測定方法について、特に尺度開発や客観評価の基準と観点の研究が必要である。

第四にキャリア教育が生涯教育と考えると大学卒業後も教育の効果の持続性、累積性についての継続的な研究をおこない、社会人になった卒業生を対象とする研究が必要である。

謝辞

本稿作成において、調査実施にご協力いただいた京都産業大学O/OCF-PBL1担当教員の皆様およびキャリア教育研究開発センターの皆様に感謝いたします。

注

注1) 今回のアンケート調査では、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力とされている基礎的・汎用的能力8つについて質問5から12に対応させて設定した。

調査結果を分析、考察する便宜上、質問5から順に○○能力として考察をおこなった。この能力名については、中央教育審議会(2011)をもとにした。以下のとおりである。

- 質問5 人間関係形成能力
- 質問6 社会形成能力
- 質問7 自己理解能力
- 質問8 自己管理能力
- 質問9 課題発見能力
- 質問10 課題解決能力
- 質問11 役割認識能力
- 質問12 将来設計能力

注2) PBL1の授業は調査時点では受講途中である。

注3) 劉・盧・石村(2005:p5)は「相関係数0.0-0.2…ほとんど相関がない 0.2-0.4…やや相関がある 0.4-0.7かなり相関がある 0.7-1.0強い相関がある」としている。

参考文献

- 中央教育審議会(2008)幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申) . http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828.htm (2014年3月10日確認)
- 中央教育審議会(2011)今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申) . http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm (2014年3月10日確認)
- 後藤文彦(2012)初年次教育の有効性に関する実証的研究. 高等教育フォーラム2: pp.1-7
- 川崎友嗣(2007)キャリア教育の効果と意義に関する研究—中学校における効果測定の試み—. 関西大学人間活動理論研究センターTechnical Reports 7: pp.43-52
- 経済産業省(2008)今日から始める社会人基礎力の育成と評価. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/h19reference.htm> (2014年3月10日確認)
- 京都産業大学キャリア教育研究開発センター(2013)キャリア形成支援プログラム2013
- 京都市教育委員会(2012)京都市キャリア教育スタンダード
- 劉晨・盧志和・石村貞夫(編著)(2005)社会調査・経済分析のためのSPSSによる統計処理. 東京書籍, 東京
- 文部科学省(2004)キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm (2014年3月10日確認)
- 奈須正裕(2001)第1章—5 総合的な学習と個に応じた指導でどんな子どもが育つか加藤幸次・高浦勝義(編著)学力低下論批判—子どもが“生きる”学力とは何か. 黎明書房, 愛知 pp.45-50
- 大竹奈津子・平尾智隆(2013)第8章初年次教育と教育目標の達成

⑤役立っていない

質問4 自分の将来のキャリアの方向は決まっていますか。

- ①決まっている
- ②だいたい決まっている
- ③どちらともいえない
- ④あまり決まっていない
- ⑤決まっていない

質問5 あなたは多様な他者の考えや立場を理解し、自分の考えを正確に伝える力があると思いますか。

- ①あると思う
- ②だいたいあると思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりないと思う
- ⑤ないと思う

質問6 あなたは他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を形成していく力があると思いますか。

- ①あると思う
- ②だいたいあると思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりないと思う
- ⑤ないと思う

《以下の質問も、いずれか一つに「レ」チェックをしてください。》

質問7 自分のしたいこと、出来ることを理解し、可能性を信じて行動する力があると思いますか。

- ①あると思う
- ②だいたいあると思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりないと思う
- ⑤ないと思う

質問8 自分の思考や感情をコントロールし、向上しようとする力があると思いますか。

- ①あると思う
- ②だいたいあると思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりないと思う
- ⑤ないと思う

質問9 あなたは、自分の身の回りや社会的事象から様々な課題意識をもつ力があると思いますか。

- ①あると思う
- ②だいたいあると思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりないと思う

⑤ないと思う

質問10 あなたは課題を分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決する力があると思いますか。

- ①あると思う
- ②だいたいあると思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりないと思う
- ⑤ないと思う

質問11 あなたは「学ぶ・働くこと」の意義を理解し、自分の立場や役割の関連を認識する力があると思いますか。

- ①あると思う
- ②だいたいあると思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりないと思う
- ⑤ないと思う

質問12 あなたは多様な生き方に関する様々な情報を活用し、主体的に判断し、生きていく力があると思いますか。

- ①あると思う
- ②だいたいあると思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりないと思う
- ⑤ないと思う

質問13 京都産業大学のキャリア教育について、意見や感想を自由に述べてください。

質問は以上です。記入もれがないか確認してから提出してください。ご協力ありがとうございます。